
猫にトロイメライ

トカゲ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

猫にトロイメライ

【コード】

N5442C

【作者名】

トカゲ

【あらすじ】

着信履歴に残る、死んだ友人の名前。「返信」は、どこに繋がるのか。誰に繋がるのか。

着信あり。一件。平ちゃん。

「平ちゃんから電話来たんだけど」

「えっ」

「どっ思っっっ」

「どっ思っっっ？ いや、ちょっと、待って。いつ？」

「昨日。俺、昨日は十二時には寝てたから、全然気付かなかったけど、二時くらい。草木も眠る、丑三つ時ってやつだね」

「丑三つ時って、何時から何時のことを言っただっけ」

「さあ？」

「いや、それは、いいや。っていうか、本当？ 見せてや」

「いいよ」

「……」

「な？」

「うわ、マジだ」

「マジなのでした」

「着信あり。平ちゃん。十七秒。怖っ」

「平ちゃんのおかんに電話で確認してみたけど、とっくに契約解除してるみたいだし、ありえないって」

「ありえないよねえ」

「だよねえ」

「……」

「……」

「返信、してみる？」

「マジで言っただけか？」

まあ、半分は冗談だけどさ。と俺は頭を掻いて、誤魔化した。

「一月前、平ちゃんが死んだ。」

死体はまだ見つかっていないらしいが、死んだ、ということでは片づけられた。溺れた猫を助ける為に川に飛び込み、そのまま帰ってこなかったという、なんとも、平ちゃんらしい最期ではあったが、唐突過ぎて、俺はいまだに事実を受け止められずにいる。

いつの日か、いつもの調子で、いつもの、あの、ふざけた調子で、「よう」なんて言っつて、帰ってくるのではないか。俺はまだ、そんなことを思っている。

葬式の時に涙が出なかったのも、そのせいだ。

「あのさ、社会人にもなつて、九時に寝るとか、ありえないから。いつまで子供気分なんだよ、お前は」

「社会人の癖に、二時まで起きてるなつて」深夜二時、平ちゃんからの電話で、俺は叩き起こされていた。「俺のほづが正しいつてば明日仕事だし」

俺達は、正に、今年の春に社会人になりたての、いわゆる新社会人というなんとも微妙な立ち位置で、社会の荒波と対峙しながら、ちよつと待つて、ちよつと待つて、と、唐突に安定さを失つた足場にうろたえている。

「外、すげえぞ」平ちゃんは、おかまいなしだった。「台風だ台風。立つてらんねー」

「酔つてる？ 平ちゃん」
「酔つてないつて」そう言う平ちゃんの声は、明らかに呂律が回っていない。

「今、外に居るの？ この、大雨の中？」

九時ごろ、ベッドに入った当初は、星が見えるほどの快晴だったはずだけど、いつの間にか外の様子は違っている。台風が来ている、

とは聞いていたが、それにしても、大袈裟な雨風が窓を叩いている。「そうそう。ここまで濡れたら、逆に気持ちいいな。傘なんて、とうにぶっ飛んでいったし。あははは。あれは、すごかったな、飛んだよ、傘。羽根が生えてるようだったなあ」

「また課長に怒られるよ」平ちゃんの遅刻癖は、課内でも有名だった。「学生気分が抜けてないんだ、って」

「大丈夫大丈夫。いやさ、そんなことより、いま暇？」

「暇な訳ないじゃんか」俺はそう言い返した。「いま暇なのは、平ちゃんくらいだよ」

「これから遊び行つていい？ いや、寝に行つていい？ 終電、逃しちゃつてさ。帰れないんだ」

「今どこ？」寝に寄るくらいならいいけど、と俺は算段を立てている。「近いの？」

「川だよ川。お前ん家の近くの、川。何川？ これ」

「さあ、俺も知らないけど」俺のアパートから、直ぐ近くに川が流れているのは事実だ。

「洪水だ」と、妙に間延びした声が、携帯電話越しに聞こえてくる。「すげえよ。これ。溺れたら死ぬなあ、こりゃ」呑気な声で、言う。

「洪水なんかで騒ぐなって」呆れた。「珍しくないだろ」

「この、力強い濁り水が、一斉に海を目指してるって考えたら、凄いやな。こんなん見てたら、人間ってなんだ、って気になるな」

「ごめん、何を言っているのか、全然判らないんだけど」

「台風が凄いつてことだよ」両手を広げて、台風を全身で浴びている平ちゃんが、眼に浮かぶようだった。

「ま、いいや。とりあえず、これから向かうから、よろ。あ」

「どした？」

「猫だ」

「猫？」

「猫、溺れてる」

「……川？」余り見たくない光景だな、と思った。「溺れてるの？」それから、少しの間があった。川で溺れている猫の姿を想像して、なんともいたたまれない気分になる。それでも、俺には何もできない。

「ちよつと、行ってくる」

ほどなく、平ちゃんがそう言った。「え？」

「行ってくる」

「どこにだよ」

「ちよつとさ」

「ちよつとつて、なんだよ。どうしたんだよ」

「行ってくる」その声はすでに、俺に話しかけているというよりは、自分に言い聞かせているようでもあった。「ちよつと、行ってくる」と、何度も言う。

「待てつて」ちよつと、と言う割には、二度と帰れない旅路を歩く旅人のような、そんな力強さを感じて、俺は不安を覚える。「何言ってるんだよ。ちよつと、そこ、動かないで」

「行かないと」平ちゃんは言う。「あとで、掛け直すから」

「平ちゃん？」

「じゃあ、また」

夜中、携帯電話の着信音が鳴って、俺は眼を覚ました。見て見ると、案の上というべきか、平ちゃんからだった。これで三回目だ。携帯電話の画面を、じつと眺める。何度見ても、平ちゃんだった。なんだよ、これ。

十秒は鳴っていた。取るべきか、と俺は迷っている。どこから掛けてきてるんだ？と当然の疑問が過ぎる。いや、本当に、平ちゃんなのか？そもそも、平ちゃんの携帯電話は、とつくに解約済み

なのだから、これは何かの間違いなのではないか。

逡巡している内に、静寂が訪れた。

血の気が下がって、気が遠くなる。足の震えが、止まらない。

「やっぱり、怖いよな。ありえないし。これってさ、平ちゃんがお前のことを引きずりこもうとしてるんじゃないか？ お前ら、仲良かったし」

「引きずり込むって」俺は顔を顰めた。「どこにさ」

「あの世だよ、あの世」本気で言っている訳ではないようだ。どこか、出来ない怪談を楽しんでいるかのような、そんな態度だった。

「でもさ、どっち道、返信とかはしない方がいいって。あれだ、携帯電話の会社のほうにも聞いてみたらどうだ？ 本当に解約済みかどうか」

「それが一番現実的だよな」

「そりゃ、そうだ。本気でさ、あの世から電話なんて来る訳ないんだし、やっぱ何かの手違いで解約されてないとか、そんなんじゃないかね。で、誰かが平の携帯拾って、電話を掛けてるとか」

実を言うと、そこまでは俺も考えていた。携帯電話の会社にも、行った。「解約済み？ 確かに？」「ええ」「でも、電話が掛かってきてるんですけど」「それは不思議ですね」「こんな調子だった。「こついうことって、今までにありました？」

「それは……」メガネをかけた社員が、顔をしかめた。「つまり、死んだ筈の人からの電話ってことですか？」

「はい」

「……」

「……」

「ないですよ」

今の間は、なんですか？

またか、と俺は飛び起きた。いつも、この時間だ。まさに、平ちゃんが川に飛び込んだ、あの時間だ。午前二時。

携帯電話が鳴っている。意を決し、俺は携帯電話を開いた。開いた瞬間、安堵した。平ちゃんからではない。着信ボタンを押す。「もしもし」

「もしもし。どう、今日は？」

平ちゃんからの電話の件を相談している、会社の同期だ。「電話、来た？」

「まだ」と俺は答えている。「まだ来てない」

「まだって」苦笑交じりの声だ。「来る前提なのかよ」

「来る気がする」実際、三日連続で、電話は掛かってきている。

「平ちゃんも、どういうつもりなんだろうなあ。いや、平ちゃんとも、限らないか」それは、俺も感じている。「平ちゃんの振りをした、何者か、かな」

「どう、なんだろうね」

「でも、確か、ちようどこんな怪談はあつたな」

「どんな？」

「どんなって、まさに、今のお前の状況と同じだよ」

つまり、死者からの電話、ということか。

「その話って、最後、どうなるの？」

電話の奥から這い出てきた何者かに引きずりこまれて。めでたしめでたし。

そんな声が聞こえる。

着信あり。一件。平ちゃん。

会社の同期と話している内に、平ちゃんからの電話が来ていた。十二秒の着信。

じつと、携帯電話を見つめる。平ちゃん、と確かに表示されている。暗く、狭苦しい部屋の真ん中で、俺は息を整える。動けない。「本当に、平ちゃんなのかよ」俺の声は、暗闇に染み込んで、弱弱しかった。

携帯電話を操作して、「返信」に合わせる。どこに、繋がるだろうか。本当に平ちゃんに繋がるのだろうか。それとも、得体の知れない、別物に繋がるのだろうか。

漫然とした恐怖感がある。部屋の暗さが染み込むような、圧迫感を覚えて、眩暈がする。平ちゃん、そこはどこだよ、と思う。

指が動かない。

歯を食いしばって、押せ、と念じた。だけど、俺の指は、まるで動かない。まるで、自分の指ではないかのように、ひたすら震えるだけだ。

「畜生……」そんな声を出したのが自分だとは、直ぐには気付かなかった。

「また台風だつてさ。いやんなるねえ。この間、来たばっかじゃねえかよ。アイツらも、飽きずに、本当、よく来るよなあ」

「……」

「もしもし?」

「……え?」

「なんか、魂抜けてたけど、大丈夫かよ」

「抜けてた?」

「完全に」と、肩を叩かれた。「あれか、あの電話、まだ気にしてるのか」

「まあ、ねえ。そりや気になるさー」なるだけ、明るい調子で言う。

「不思議だよね、不思議」

「無視しとけて。平の筈ないんだし」

「やっぱり、違うかな」

「当たり前だろ。なんで、平から電話が掛かってくるんだよ」

「だけど」と俺は言う。若干、ムキになっていた。「だけど、もし、そうだったら、どうする」

きよとん、と眼を丸くして、それから顔が歪んだ。「本気で言うてるのかよ」

「半分は」そう言うてから、自分でも、何を言い出しているのか、判らなかつた。「だけど、本当に、平ちゃんだったら」

「おいおい」

「俺はまだ、ちゃんと、別れを告げてないんだよ」

また、つて、言うてたじゃねえかよ。そう、内心で悪態を吐き、それから、その、「また」というのは、あの毎夜訪れる着信のことではないか、とも考えている。

「現実を見ろつて」

そんな声が聞こえてきた。「急だったし、ショックなのは判るけどよ。平は死んだ。それは変わらないし、死んだ人間からは、電話はこねえよ」

だけど、現に、来ている。どこからか、俺に毎夜電話を掛けてきている。それから、もしや、と思った。平ちゃんは、まだ生きているのではないか、と。

「あんまり様子がおかしかったらよ、電話番号を変えたほうがいいぜ」

「それで、解決？」

「別にさ、幽霊とは言わないけど」と、そこで一度言葉を切り「普通にさ、リアルに、詐欺とかさ、そういうのも、怖いし」世の中には、悪意が溢れてるから、と続けて、肩を竦めた。「いや、そうだな、絶対にそうしたほうがいいって。今日にでも変えたほうがいい」

「だけど」だけど、と言って、それから、なんと続けるべきか、判らなかつた。だけどそうしたら、平ちゃんからの電話が来なくなるじゃないか、とでも言いだす所だったのか。

「……そうだよね」

結局、俺はそう認めた。確かに、それが一番手っ取り早い解決法に思えた。

馬鹿馬鹿しい、と頭を振る。「まあ、大丈夫だよ」と、適当に濁した。

帰り道。

空を、見る。暗澹とした雲が、叙々に広がっている。

そうか。

台風が来るのか。

部屋の電気を消して、ベッドに横になり、漫然と天井を眺めていた。

その内に、雨や風が窓を叩く音が聞こえてきた。その、唐突さに、少しだけ眼が冴える。先程までの静寂が嘘のような、世界中の眠れる人々を叩き起こすかのような、そんな勢いのある、打楽器のような、雨風の音だ。

あの時も、こんな、雨風の音が聞こえていた。

時計を見る。午前の、一時五十七分。今頃はきつと、川が氾濫を起こし、荒れ狂う流れとなって、急ぎ足で海を目指している。その川を、見に行こうかな、とも思った。荒れ狂う川の流れを見れば、平ちゃんの死を確信し、そして、いつもの、あの電話は、何かの間違いだっただ、と決着を付けることが出来るのではないかと。

携帯電話を手に取った。一時五十八分。

来るぞ。と、俺は身構える。眼が冴えてきて、暗闇の中、ぼんやりと怪しげに光る携帯電話の画面を眺める。今まで、若干の誤差はあったものの、電話が鳴りだす時間は、全て二時前後だ。もう、いつ鳴りだしてもおかしくない。

上体を起こして、身構えた。それから、俺は、何をやっているんだ。と疑問に思う。

「もし、今日も電話が鳴ったらどうする」俺は、自分でそう問いかけている。「どうするつもりなんだ」

「電話を取る」声に出してから、そうか、そのつもりだったのか、と、自分で驚く。

「何故だ」

「もう一度、話せるかもしれない」

「馬鹿馬鹿しい」

「馬鹿馬鹿しくてもいい。どうせ、誰も見ていない」

「死者からの電話なんて、本気で信じているのか」

「現に、来ている」

「他の可能性がある。もっと、現実味のある、他の可能性が。もっと、暗澹たる、他の可能性が」

「他の可能性なんて、知ったことか」

「考え直せ。この電話は、どこかおかしい」

「平ちゃんがおかしいのはいつものことじゃないか」俺は、自分自身に潜む、何者かを説得するかのような会話を続けた。「あいつは、いつつも突然なんだよ。いきなり死ぬし」

そして、数秒の静寂。雨が窓を叩く音が聞こえる。

「本当に、電話を取れるのか」疑問というよりは、詰問に近い、そんな声が聞こえてくる。「お前はびびってる。電話の向こうがどこに繋がっているのか、電話の向こう側に誰が居るのか確証が持てていない」

電話が鳴った。ハツとして、顔を上げる。眠りに落ちかけていたのか、頭が瞬時には回らなかった。携帯電話を握りしめて、「平ちゃん」の文字を確認する。来たぞ。と俺は身構え、携帯電話を開いた。

そして、「着信」のボタンに、手を伸ばす。伸ばすが、そこで止

まる。携帯電話が鳴っている。

体が動かない。呼吸が、うまく出来ない。怖い。どこだ、そこは誰だ、お前は。

疑問や恐怖が次々に溢れ出てきて、うずくまる。どうすればいいと誰かに問う。

やがて、どこか寂しげな余韻を残して、着信音が消えた。ふと、二度と、電話が掛かってくることはないのではないか、と不安が過ぎた。本当に、そんな、寂しげな余韻だった。静寂が襲ってくる。「待てよ」と俺は、静かになった携帯電話を見つめながら声を出している。「待てよ、平ちゃん」ちよっと、行ってくる。そう言った平ちゃんの声が、頭の中で響いた。「ちよっと、待てって！」

そして俺は、「返信」ボタンを押した。

呼び出し音が鳴っている。本当に、呼び出している。二度、三度と、やきもきさせるような間を置いてから、ガチャ、と音がした。

誰かと、何者かと、本当に繋がった。

「……もしもし」暗闇の中、俺の声が弱弱しく響く。「もしもし」電話越しから聞こえてくる音は、周波数の合わないラジオが出すような、砂嵐の音だけだった。ざー、と雨音にも似た、その音を聞きながら、俺は、「もしもし」と何度か繰り返す。

「……平ちゃん？」返事はない。「平ちゃんなのかよ」「……」

返事は、ない。返事はないが、砂嵐の音のトーンが、若干、変わったような、そんな気がした。

「平ちゃん、だよね」繰り返す。「そうなんだろう？」

「……」

「……」

「……」

「……………」

「いきなり死んでるんじゃないよ。びっくりしたじゃねえかよ。バカ」ぽつりと、そんな言葉が零れ出した。

「急すぎなんだよ。八十まで生きるとか言ってた癖にさ。なんなんだよ、そのザマは。まだ、死体も出てないって、どういうことだよ。何、死体が出ないような死に方してるんだよ」

電話越しから聞こえてくるのは、砂嵐の音だけで、それが平ちゃんとも限らないのだが、とにかく、俺はもう止まらなかった。

「そっぴや、平ちゃん、泳いでる所見たことないけど、実は泳げないんだよ、そつだろ平ちゃん。こないだ海に行った時も、ずっと波打ち際にいたしさ。その癖、猫を助ける為に川に飛び込むなんてなんのつもりだよ」

言いたい放題、言う。バカ、と罵る。返事はない。それをいいことに、一方的に話しかける。「なにが、ちよつと、だ。今、そつと、どんだけ遠いんだよ」

それから、一間を置き。少しの沈黙を感じた後、で、言う。

「……………元氣？」馬鹿馬鹿しい、と思いつながら、涙が溢れてきて、俺はそれを止めることが出来ない「そつちは、どう？」

「……………」

「こつちは、また台風が来てるよ」

「……………」

「電話、中々出られなくて、ごめん」

「……………」

「俺、まだしばらくは、そつちにいけそうにないけどさ」

「……………」

「いつか、だね。いつか、そつちにいくさ。いつかは、判らないけどさ」

「……………」

「じゃあ、また」

それから、別れを告げるような、そんな間を置いた後、電話が切れた。不思議なことに、俺は、二度と平ちゃんから電話が掛かってくることはないだろうな、という確信を得て、寂しいような、爽快なような、そんななんともいえない気分になる。
気付けば、窓を叩く雨風の音も消えていた。

翌朝は、妙に眼が冴えていた。カーテンを開けてみると、眼を覆いたくなるほど眩しい陽光が差し込んで来て、俺は、台風が去ったことを知る。

いつもより早目に家を出た。まだ、六時にもなっていない。付近の住人もまだ活動していないのか、心地の良い静寂が辺りを包んでいる。

駅に向かう道すがら、川に寄ってみた。台風の影響か、水かさが増していて、歩みもいつもより速い。「平ちゃん、海まで流されたんかな」ぼんやりと呟き、それから、時計を見て、時間に余裕があることを確認してから、河川敷まで下りた。

ランニングをしている老人や、犬の散歩をしている婦人と挨拶を交わしながら、とくに意図もなく、川の流れを追うように歩く。

その内に、猫を見つけた。

頭上でさんさんと大地を照らす太陽から逃れるかのように、木陰で丸くなっている。平ちゃんが助けた猫なのか、それとも、全く関係のない野良猫なのか、もっと言ってしまえば、そもそも平ちゃんは、猫を助けることに成功したのか、その辺りのことすら、まるで判らなかつたが、その猫に近づいてみた。猫は、俺の足音に一瞬だけ耳をぴくりと動かし、顔を上げたが、直ぐに興味がなさそうに、また寝込んだ。「なあ」

「平ちゃん、どうなっただよ」と、俺は、声を掛けている。「ど

猫にトロイメライ

「こに行つたんだよ」

猫が欠伸をした。

頭上の青空を見たようにも見えた。

(後書き)

大人の夏ホラー(予定)です。
同じく大人の夏ホラーに投稿した「侵食」とは全く別のベクトル
になりました。

猫にトロイメライ

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5442c/>

猫にトロイメライ

2008年8月29日18時37分発行